# 地方総合

## 各地の話題

# 児童ら茶の味と香り楽しむ

### 静岡・森町 小学校でお茶教室

【静岡】「家で飲むよりおいしい！」と笑顔でお茶を楽しんだのは、森町の小学5年生児童140人。同町内の小学校3校それぞれの会場でこのほど、「お茶の入れ方教室」が開かれた。

児童たちは講師を務めた同町茶商組合青年団（松浦泰隆団長）から、湯冷ましや回しつぎのポイントなどおいしいお茶の入れ方を学んだ＝写真。

同町内の人気和菓子店の菓子とともに、同町産の深蒸し茶をはじめ茎茶やほうじ茶など6種類のお茶を飲み比べた。「このお茶飲むの初めて」「寒い季節はあったかいお茶がいいよね」と会話を弾ませながら味や香りを楽しんだ。

同茶商組合からは同町産の深蒸し茶が、同町茶業振興協議会からは急須が児童一人一人に贈られ、児童たちは「帰ったら家族に入れてあげよう」とにこやかな笑顔で話していた。

町の基幹産業であるお茶に親しむことで、郷土を愛し恵まれた自然を大切にする気持ちが育つことが期待されている。

（堀尾壮平情報員）

# アクティブシニアを農業へ

## 農業体験で感触上々

### 徳島県シルバー人材センター連合会

【徳島】農業労働者の不足が懸念される中、県シルバー人材センター連合会は、アクティブシニア（概ね60歳以上の就労意欲がある人）の農業分野への参画を促進しようと尽力している。同会は県農林水産部と連携し、2023年から「農×アクティブシニア連携実践事業」を実施。アクティブシニアを対象にした農業体験会の実施や総合窓口の設置、初めてシルバー人材を利用する農業者への補助などを行っている。

25年12月9日に実施した体験会には8人が参加。参加者はバスで鳴門市の㈲ふぁむに移動し、サツマイモの皮むき作業体験や生産、加工工場の見学を行った＝写真。参加者アンケートではほぼ全員が満足とし、全員がシルバー人材センターの仕事をやってみたいと回答した。

今後について同会事務局次長の田渕洋子さんは「シルバー人材は時間厳守で丁寧な作業をする人が多い。事業者にとってメリットがあるだけでなく、現役農家の人は健康寿命を維持しやすいといわれており、会員にとってもメリットがあると考える。ホームページやチラシなどで周知し、担い手不足の解決策として事業を続けていきたい」と力強く語った。

## 近畿の農業法人経営者が交流会

### 京都市で「法人の社会的使命」を討論

【京都】近畿府県農業法人組織現地交流会が1月29～30日に京都市内で開かれ、近畿地区の農業法人経営者ら約120人が参加した。

講演では、ブドウ農家から世界的企業へ成長をめざすアグベル㈱（山梨県）の丸山桂佑代表が、AIや自社開発アプリを活用した先進的な栽培管理などを紹介。続いて、グループ全体で年商100億円を達成した㈱和郷（千葉県）の木内博一代表が、生産者の全国ネットワークによる加工・流通・販売事業や経営多角化の取り組みについて紹介した。

講演後は「農業法人の社会的使命」をテーマにパネルディスカッションを行い、㈱早和果樹園（和歌山県）の秋竹俊伸代表、ことの山田敏之代表を交え、人材の確保・育成などについて議論を深めた。

29日に行われたパネルディスカッション

## 父から技術と思い受け継ぐ

### 子育ての中、キャリア積む

岡山市
**村井友紀さん**

【岡山】家業を継ぐことを決心して、まもなく10年。岡山市の村井友紀さん（44）＝写真＝は、結婚して故郷を離れていたが、家を守らなければならないと夫と一緒に実家に戻った。「手伝いをしていく中でこの畑や土地、地域の特産品を守らなければと思い就農を決意した」と語る。出産、子育ての中、家族の協力を得ながら農業者としてのキャリアを積み重ねている。

友紀さんは「オーチャードイタノ」3代目として、両親から経営を受け継ごうとしている。現在、親子3人でブドウはシャインマスカットを主に7種、モモは2㌶で清水白桃を主に3種を栽培。「けんかはするけど、親子なので助けてもらいながら子育てと両立している」と家族経営のメリットを語る。

「おかやま農業女子」へ参加するようになり、仲間との出会いで新たな視点が生まれ、前向きな気持ちになった。SNSでの投稿も始め、農業が面白くなったという。また、農業以外の事もやってみようと、狩猟免許も取得した。

友紀さんは技術の継承について「父からはあまり言葉で教えてもらえず、教科書があるわけでもなく、父を見ながら感覚で覚えていくので難しい。でも父の思いは十分に伝わる」と語る。2代目からの技術を少しずつ身につけ、思いを受け継ぎ、生まれ育った風景を残そうと今日も奮闘している。

## 就農・就業へ一歩踏みだす

### 大分市で就農・就業応援フェア

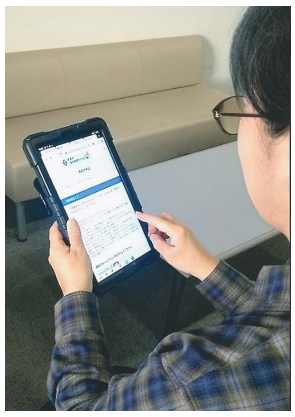
【大分】就農や農業分野での就業をめざす人を対象に「おんせん県おおいた就農・就業応援フェア」が1月31日、大分市の「J：COMホルトホール大分」で開かれ、県内外から66組84人が来場し、関係機関による相談や制度紹介が行われた。

会場には、県内のファーマーズスクールや就農学校など計23ブースが並んだ。就農・就業を横断的に案内する総合相談ブースも設けられ、来場者は複数のブースを回り、就農に必要な資金支援や

相談内容を確認しながら支援制度などを説明

## 農地法の相続の届出、電子申請開始

### ＝滋賀・草津市農業委員会＝



電子申請は簡単に行うことができる

【滋賀】草津市農業委員会は、1月から農地法第3条の3に基づく農地の相続などに関する届出で電子申請を開始した。

これまであらかじめ届出書を作成し、農業委員会へ出向く必要があったが、電子申請の導入によりスマートフォンやパソコンから手続きが可能となった。来庁の手間が不要となり、利用者の利便性向上が期待されている。

取り組みは同市の第6次草津市総合計画に位置付けられるリーディングプロジェクト「DX推進プロジェクト」の一環で、行政サービスの向上を目的としており、農地法第3条の3の電子申請は全国的にも少ない取り組みだ。

同農業委員会の相井義博事務局長は「農地法は他法令との調整や現場での確認事項が多いため、電子申請が難しいと思っていたが、形式審査で完了するものは申請者などの利便性が高まるため、これからもDX化を進めたい」と話す。

## 就農めざして具体的に相談

### 高知市で就農相談会

市町村ブースでは具体的な相談が続いた

【高知】県と県新規就農相談センターが主催する「こうちで就農相談会」が2月8日、高知市で開催され、県内の13市町村と県立農業担い手育成センターなど3関係機関が相談ブースを設置した。

独立就農や農業法人への就職に加えて、短期の農業アルバイトの希望者など39組48人が相談に訪れた。就農を希望する人は目当ての市町村ブースを訪れ、就農のタイミングや支援制度などについて熱心に相談していた。

相談ブースでは、市町村の受け入れ体制に加え、農地やハウスの取得方法など就農に向けた具体的な相談が多かった。

会場内では就農の心構えや準備、支援制度などを紹介する「就農ミニセミナー」を開催。南国市でシントウ20㌃を栽培している就農5年目になる日和佐洸介さん（29）の「先輩農家さんの体験トーク」も行われた。

日和佐さんは「大学在学中から農業を志し、県立農業担い手育成センターや指導農業士のもとで栽培技術や経営手法を身に付けた」と説明。参加者からは経営状況や労働時間などについての質問が相次いだ。

## 就農・就業へ一歩踏みだす

### 大分市で就農・就業応援フェア

【大分】就農や農業分野での就業をめざす人を対象に「おんせん県おおいた就農・就業応援フェア」が1月31日、大分市の「J：COMホルトホール大分」で開かれ、県内外から66組84人が来場し、関係機関による相談や制度紹介が行われた。

会場には、県内のファーマーズスクールや就農学校など計23ブースが並んだ。就農・就業を横断的に案内する総合相談ブースも設けられ、来場者は複数のブースを回り、就農に必要な資金支援や




相談内容を確認しながら支援制度などを説明

## 青年農業者や学生研究成果など発表

### 和歌山県

【和歌山】県4Hクラブ連絡協議会と県農業公社は2月5日、和歌山城ホールで「令和7年度和歌山県青年農業者会議」を開催した。県の協力のもと例年開催しており、参加者の日頃の調査研究や経営の成果、目標発表を通じて、農業経営の発展と農村振興につなげる研修内容、受け入れ体制を熱心に確認していた。

今回は集客力向上を図るため、インスタグラムなどSNS広告を強化したことが特徴。主催者によると、40代の来場者が最も多く、インスタグラムを見て来場した人が最多だった。

同フェアをきっかけに、研修参加や就農へ進む事例は少なくなく、関係機関が一堂に会する場は担い手確保の重要な機会となっている。主催者は今後もSNSを含む多様な手段で情報発信を強化し、さらなる集客と地域農業の人材確保につなげたい考えだ。

青年農業者や学生が一堂に会して研究討議

ことがねらいだ。

当日は地域で活躍する青年農業者や農林大学校、農業関係高等学校の学生、関係者ら85人が参加。県内4Hクラブ5団体5人が青年農業者のプロジェクト・意見を発表し、農林大学校、農業関係高等学校3校4人が特別発表を行った。

みなべ梅郷クラブの里村修造さんが最優秀賞、御坊市4Hクラブ連絡協議会の上山貴生さんが優秀賞、南広4Hクラブの久保田裕貴さんが奨励賞を受賞した。

農業者の育成支援を担当する県経営支援課の木村学班長は「プロジェクト活動などを通じて、次の時代を担う農業者として成長してほしい」と話した。

# 兵庫県農業会議

## ひょうご農業委員会女性ネットワーク特集

兵庫県内の女性農業委員や農地利用最適化推進委員で構成する「ひょうご農業委員会女性ネットワーク」（高尾利美会長）は、女性委員の交流と相互研さんなどを通じ、県内の農業委員会活動の活性化に向け取り組みを進める。女性委員のさらなる活躍を促進するため、同ネットワークの活動を紹介する。

# 女性委員のさらなる活躍をめざして

## 市長会と町村会へ積極的に要請

### 女性委員の登用状況も説明

同ネットワークは昨年12月、神戸市で兵庫県市長会と兵庫県町村会宛てに2026年度の農業委員会の委員改選に向けた「農業委員会における女性委員等の活躍についての要請活動」を実施した。

市長会の酒井会長への要請書を手渡した（左から）荒木会長、高尾会長、酒井会長、藤木副会長、松田副会長

町村会の山名会長へ要請書を手渡す高尾会長

要請には、同ネットワークの高尾会長と藤木悦子副会長、松田静副会長、県農業会議の荒木一聡会長が参加。県市長会の酒井隆明会長（丹波篠山市長）と県町村会の山名宗悟会長（神河町長）とそれぞれ面会した。

高尾会長、藤木・松田両副会長は「県内の女性農業委員の比率は13・2％で、女性の声を届けるために3割をめざす必要」「女性委員が安心して活動できる環境醸成と支援」について要請した。

荒木会長からは「集落に農業委員の推薦を依頼しても、女性委員が出にくい雰囲気がある」と指摘。「各市町ごとに女性委員の候補者リストを作成し、女性が出やすい環境づくりが必要」などと訴えた。また、同ネットワークの活動をより多くの人に知ってもらう必要性について話した。

### 市長会・町村会の会長と意見交わす

要請後の意見交換で酒井会長は「農家が激減しており、農業・農村の尊さへの認識が薄れてきた」「女性委員の登用促進で、農業委員会・農政に女性の声を届けたい」と述べた。山名会長は「各種委員へ女性登用を進めているが、集落などから推薦が出にくい雰囲気がある」との現状認識と、「今回の要請活動を踏まえ、女性委員のさらなる登用に向け機運を醸成したい」と話した。

## 研修と視察で地域越えた交流

### 牧場視察と農業者年金の講習実施

研修会場の西山牧場（左はチーズ＆ピザ工房、右はアイスクリーム工房）

同ネットワークではこれまで、毎年2回、神戸市で交流研修会を開いてきた。本年度はより魅力的な内容にするため、26年2月4日に「現地視察も兼ねた交流研修会」を初めて催した。県内の女性委員ら41人が参加した。

視察先は、三木市農業委員会の農地利用最適化推進委員・西山きよみさんが家族で経営する「西山牧場」（三木市吉川町）。西山牧場は、西山夫婦が1965年に2頭の子牛を導入して創業。半世紀以上にわたり規模拡大と6次産業化に取り組み、地域に根ざした畜産経営を継続している。

2001年に開設した「アイスクリーム工房 BOSS＆MOM」では、搾りたての生乳を活用し、自家栽培と地元農家の「新鮮な野菜や果物」を原料として、年間約80種類のアイスクリームを製造している。16年には「チーズ＆ピザ工房」も新設するなど、地元とともに歩みを進めてきたという。

視察後に行われた研修会では、昨年の「市長会と町村会への要請活動」や全国研修会への参加などについて、高尾会長、藤木副会長、松田副会長が報告した。

また、農業者年金の研修も実施した。講師は、農業者年金広域推進員や京都府農業会議現地推進役、全国農業会議所専門相談員などを務める永武幸子さんで「女性にこそ必要な農業者年金」と題して講演した。永武さんは京都府の京丹波町農業委員会事務局長などを歴任し、現在は農業者年金加入推進の第一人者として講演活動などを行っている。自らの加入推進の体験をもとに、農業者年金のメリットや必要性をわかりやすく説明した。

講演後は、各グループに分かれ「西山牧場のピザ」を食べながらランチミーティングを開いた。県内各地から集まった女性委員が交流と情報交換を行い、楽しく有意義な時間を過ごした。

参加者からは「地域を越えて交流できて良かった」「研修会にまた参加したい」などの声が寄せられ、今後に向けた女性ネットワークの新たな拡がりの機会となった。

㊤41人が参加した研修会、㊦自らの加入推進の体験をもとに講演した永武さん